大江志乃夫教授著作目録

名古屋大学中央図書館で資料を探していたとき、たまたま標題の「目録」を手にした。大江志乃夫先生の本は若いとき、何冊か読んだことがある。

この目録により、大江先生の膨大な著者・論文・書評・評論、家永三郎教授の教科書裁判「裁判所提出意見書及び鑑定書」などを知ることができた。先生は 1976 年に東京教育大学から茨城大学人文学部に移られた。大学の冊子のなかで、ご自分の研究分野を社会史とされ、これを「近代日本社会史とくに近代軍事史及び民衆史」と説明されている。

大江志乃夫先生は 2009 年 9 月に亡くなられた。田村貞雄氏を中心にして、著作目録が作成されることになり、2011 年 3 月に刊行された。目録のなかに、宮本憲一先生が「大江志乃夫の思い出」を寄稿されている。最初と最後を紹介したい。

「大江志乃夫と私は、旧制名古屋大学経済学部経済学科の最後の卒業生である。彼は経済史の四方博ゼミ、後に日本経済史の塩沢君夫ゼミに属し、私は社会思想史の水田洋ゼミの出身であり、卒業後、彼は日本近現代史、私は財政学から環境経済学に至る政策科学を専攻していたので、一緒に仕事をしたのは、水田洋先生の還暦記念論集と昭和史(小学館)ぐらいである。‥‥とはいえ私達は、親友をもって任じており、お互いの著書はすべて交換し、日常の動静は報告していた。

大江志乃夫の軍事史、特に『日露戦争の軍事史的研究』(岩波書店 1976 年)については、司馬遼太郎は口を開けば高い評価をしていた。司馬さんは環境問題に関心を持っていたので、私とは少しのつきあいもあったが、私の見るところ、大江の業績に大きく影響を受けていたと思う。田村貞雄さんの指摘のように、司馬遼太郎の作品には初期の明治ナショナリズムの評価が高すぎ、特に明治政府の朝鮮政策の評価の間違いがあるだろうが、昭和の軍事学批判では、大江と共通していたのではないだろうか。大江の小説『凩の時』(筑摩書房、1985 年)が大佛次郎賞をもらったのは、司馬さんの激賞によるところが大きいと思う。かれは研究者としての大江をたいへん尊敬していたのである。そのことは書いておかねばならぬ。

大江が開いた歴史の分野は広く、いずれも先駆的業績のようである。ぜひ若い研究者がこの先達の業績を評価して、継承してもらいたいものである。」

(2017年11月25日)